

Wesley Hall News



短大中庭の吹流し

青山学院スクール・モットー

地の塩、世の光
The Salt of the Earth, The Light of the World

(新約聖書 マタイによる福音書 第5章13~16節より)

No.82
2004.12.10

特集 クリスマス 説教 救い主イエスとの出会い

坂上三男 2

- 元学院宗教部長 佐々木藏之助先生をお見舞いして 深町正信 4
- “I have a dream”（私には夢がある） 渡辺 健 6
- 第20回 オール青山ハンドベルコンサートについて 小澤淳一 8
- 青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料 その9 氣賀健生 10
- キリスト教図書紹介 天使がうたう夜に 川島祥子 12
- 私の教会 久留米バイブル・フェローシップ（KBF） 13
- 宗教センターだより 14

説 教

「救い主イエスとの出会い」

ルカによる福音書 第2章10節

坂上 三男

高等部宗教主任



今年もクリスマスを迎えようとしております。町ではすでにクリスマスの装飾と音楽で、クリスマスマードに溢れています。日本では、クリスマスは今や年中行事の一つになり、デパートではクリスマスセール、レストラン、ホテルではクリスマスパーティー、幼稚園、学校ではクリスマス会と誰もがクリスマスに関わるようになりました。

クリスマスを宝物のように守ってきた人たち

クリスマスが表面的にせよ今日のように世界、また日本に広まった背景には、クリスマスを単に年中行事としてだけではなく、何よりも大切なものとして守り、祝ってきた人たちがいたからだと思います。その人たちにとって、クリスマスは大切な宝のようなものであったでしょう。宝物ですから、どのような困難、迫害があつても手放してはならないし、多くの人と共にその宝物の喜びを分かちあいたいと思ったでしょう。大切な、大切な宝物として2000年の長い年月、クリスマスを守ってきた人たちのお陰で、今日世界中の人たちがクリスマスの祝いに預かっているのだと思います。

私もその祝いに預かってきた一人ですが、幼稚園のときからクリスマスはプレゼントがもらえ、クリスマス劇や楽しい遊びの時でした。12月末はクリスマス。続いてお正月。それは運動会や遠足と同じように楽しい行事の一つでした。しかし、クリスマスが単に楽しい行事の一こまではなく、私たちの人生で決定的に大切な宝物だと知ったのは大分あとのことでした。

救い主イエスの誕生

クリスマスは言うまでもなく、イエス・キリストの誕生ですが、教会では単にイエス・キリストの誕生ではなく、「救い主」イエス・キリストの誕生として祝います。この「救い主」としてのイエスの誕生を祝うか、ただクリスマスを祝うかでは喜び方が決定的に違うと思います。

私のクリスマスとの出会いは、幼稚園、続く日曜学校のクリスマスでした。私の家はキリスト教信者の家ではなかったのですが、幼稚園がキリスト教の幼稚園だったので、そのときから礼拝を守り、クリスマスは毎日曜日の礼拝の延長でもありました。それでクリスマスは、単なるクリスマス会ではなく、「救い主イエスさま」の誕生の意味を知らせる礼拝から始まりました。けれども子供の頃は、「救い主」イエスさまの深い意味など分かるはずもありません。ただ楽しいという思いです。その意味が少し分かるようになったのは、自分の人生のことをいろいろと考える年齢になってからです。

聖書が記している主イエスは、身分の低い人たち、病気、障害のある人たち、罪人と言われていた人たちを深く愛されたイエスです。また自分を愛してくれる者を愛するだけではなく、

「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」

(マタイ福音書5章43節)

と教えられたイエスです。私は高等学校も終わりに近づいた頃、このイエスの愛に強く惹

かれ、感動し、少しでも近づきたいと思いました。また、聖書が伝えるイエスは私たちの罪に変わって十字架の犠牲を負われ、私たちの罪を神に執り成して下さっています。私は自分を善人などとは考えられず、むしろ罪ある人間だと思いましたので、この罪の執り成しを抵抗なしに受け入れる事ができました。そればかりかイエスを知ることにより、人生の意味と目標も知るようになりました。私は生涯に亘って教えを受けたいと思い、決心して洗礼を受け、進んで教会に行くようになりました。それからは、まとわり付いていた虚無感から脱し、日々の生活に目標が与えられ、生きがいのある毎日を送ることができますようになりました。イエスを救い主と信じ、イエスの教えに生きる道を歩んだおかげです。

聖書が伝えているイエス・キリストは、私たちすべての人の「救い主」です。クリスマスのメッセージは、次の言葉にあるように、救い主イエスの誕生です。

「恐れるな。私は、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町であなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。」

(ルカによる福音書2章10節)

クリスマスの本当の意味

クリスマスの本当の意味は、私たちに救い主(メシア)が誕生して下さったということです。神様が私たちのために救い主を送ってくださつたのです。救い主イエス・キリストを介して神様は私たちすべての人間を愛し、お救い下さるのです。クリスマスにはこのすばらしいメッセージがあります。

このクリスマスの本当の意味を知るようになると、クリスマスは無くてはならないものであり、人生に意味と喜びを与えるものです。この喜びは、生きるにも、死ぬ際にも大切な宝物です。この宝物のお陰で、困難な時も嘆きの時も、忍耐と慰めを与えられます。人生に大切

な希望を持つこと、微笑を持つこと、感謝することもこの宝物を通じて与えられます。また死に対しても恐れることなく希望を持てます。救い主を通じて天国での復活を信じることができます。

「神は、その独り子をお与えになつたほどに、世界を愛された。独り子を信じるものが一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

(ヨハネによる福音書3章16節)

私たちにとって宝物となるようなものはいくつもあるかもしれません、神様が送られたイエス・キリストこそ、私たちの本当の宝となるお方です。イエスの12弟子たちも最初は、イエスを「救い主」とははつきり知りませんでした。しかし、受難から、十字架、復活に至るイエスの生涯のすべてを知って、はじめてイエスは「救い主」であったと知りました。それからは人が変わったように喜びに満たされ、どんな迫害を受けても、「救い主イエス」を人々に伝えて歩きました。この弟子たちを通して世界中に「救い主」イエスが伝わり、クリスマスが祝われるようになりました。私たちもイエスの弟子たちのように、「救い主」イエスに出会い、永遠に亘る宝物を持ちたいと思います。



元学院宗教部長 佐々木蔵之助先生をお見舞いして

深町 正信
院 長

青山学院創立130周年を記念して、私は去る6月16日から24日まで海外出張し、青山学院の三人の創立者の墓を訪れ、校友会口サンジェルス支部の方々と共に墓前礼拝をいたしました。また、ちょうどメキシコで開催されたIAMSCU（国際メソジスト系学校・大学連盟）の委員会にも出席いたしました。

この出張のもう一つの大事な目的に、元学院・大学宗教部長の佐々木蔵之助先生を口サンジェルスのリハビリテーション・ホスピタルにお見舞いすることができました。6月17日に、私は校友の久山康彦牧師（センテナリー・メソジスト教会）と伊藤秀美牧師（ロサンジェルスの教会）の案内で、佐々木蔵之助先生を病院にお訪ねしました。佐々木先生は近年、美代子夫人に先立たれ、また、お子様も天に召されて、ご高齢でもあり大変に弱つていると聞いていたからです。今年93歳になられた先生は、今は口から食物をとることができず、チューブで身体に栄養を摂取しているという難しい状態でした。

佐々木先生の入院先は、老人専用の病院だけに施設はとても行き届いており、ナースたちも患者に優しく対応しているのを見てほっとした気分になりました。先生の病室に入ると、先生はベッドに目を閉じて寝ておられました。久しぶりにお会いした先生のお身体は随分小さくなられて、体力が非常に弱っていることが一目でよく判りました。同室の患者さんの話によると、先生は一日中、このようにベッドに横たわり、一日に一度、体を直させないためのリハビリを受けるために出掛けるということでした。時々娘さんが訪ねて来て、先生を介護しているとも話してくれました。

ちょうどリハビリの時間になり、二人のナースが車椅子で先生を迎えて来るので、お別れの前に私たち三人は先生の手を取り、一緒に輪になってお祈りをしました。青山学院が創立130周年を迎

えたこと、宣教師の先生方のお働きに感謝していること、佐々木先生の上に主の恵みが豊かにあるようにと祈ったとき、先生が私の手を強く握り返してくださいました。祈りが終わって先生の顔を見ると、もの言わぬその目に涙が流れていきましたので、その瞬間に、先生が青山学院のこと、私のこと、そして、日本でのお働きの数々のことを確かに思い出されているのだと一同は強く感じました。すると同室の方が、彼はあなた方の言うことを良く判っているよ、と声をかけてくれました。私は後ろ髪を引かれる思いで、先生の病室を出ました。そして、振り返ると、先生が車椅子に乗つて二人のナースと共にじっとこちらを見ておられました。私は思わず、「佐々木先生、キリスト教学校としての青山学院の大変な時期に、ご夫人と共に良いお働きをなしてくださり有難うございました」と心の中でそつとつぶやきました。そして、これが佐々木先生とこの地上でお目にかかる最後の時ではないかと思うと、胸に迫る熱いものを感じました。

佐々木蔵之助先生は前院長・理事長の故大木金次郎先生の強い要請を受けて、米国の合同メソジスト教会から派遣された宣教師として青山学院に着任されました。学院のキリスト教教育の再建と、特にキャンパス・ミニストリーの充実のために、大学を中心に力強く働いてくださいました。先生の深い学識とすば抜けた英語力は学生時代から有名であったということですが、それを青山キャンパスの働きの中で晩年にも遺憾なく発揮されました。

佐々木先生は1977年から1986年まで学院宗教部長として、その当時の難しい宗教主任の問題、新しいキリスト教活動の編成のために色々と努力されました。先生はいつも笑みを浮かべて、その温かな人柄は誰もが認めるところでした。キャンパスのどこで会っても、先生は必ず「お元気ですか」

と気軽に声をかけてこられました。これは多分永年にわたり米国で生活されてきたので、“Hello, How are you?”とごく自然に口に出たのだろうと思われます。佐々木先生のこの明るい人柄が当時、私にはとても爽やかに感じられました。また、先生はよくご夫人と共に会合に出席されましたが、これもお若いときから米国人の中で生活されてきた先生の自然な振る舞いであつたろうと思います。

佐々木蔵之助先生は北海道網走のお生まれで、1936年に青山学院高等学部英文科を卒業されました。その後、1940年に、オハイオ・ウェスレアン大学を卒業、B.A.の学位を取得されて、同大学大学院を修了、M.A.の学位を授与されました。時に日米開戦となり、先生は日系米国人として強制収容所に入れられ、そこでしばらく不自由な生活を体験されました。終戦後の1946年に、母校オハイオ・ウェスレアン大学から名誉神学博士号(D.D.)を授与されました。1947年にはアイリフ神学校大学院より、「初代キリスト者の国家観」の博士論文により神学博士号を授与されました。他方、先生は1941年、米国メソジスト監督教会の按手礼を受けて、正式に牧師となりました。爾来、先生はカリフォルニア・ストリート・メソジスト教会、ウェスト・ロサンジェルス・コミュニティ・メソジスト教会、センテナリー・メソジスト教会、ファースト・ユナイテッド・メソジスト教会、そしてハリス・ユナイテッド・メソジスト教会の牧師を歴任され、多くの日本人の魂の救済のために尽力されました。

青山学院における佐々木先生の居られるところには、必ず笑いの渦が起り、講義やチャペルで独特な佐々木節で、熱心に福音の真理を語られました。先生はかつて日米学生会議の日本代表でありましただけに、在任中もその流暢な英語力で外国からのゲストを迎えて、青山学院と外国の大学との交流に尽力されました。



左より、伊藤牧師、佐々木先生、筆者

佐々木先生は「キャンパス・ミニストリーの神学」という論文を書いていますが、大学におけるキリスト教活動にとり、一つ指針とすべき内容のものであります。先生の定義によれば、キャンパス・ミニストリーとは米国の大学におけるキリスト教活動を総合して使われていた言葉であります。そして、キャンパス・ミニストリーに従事している者を「キャンパス・ミニスター」と呼ぶようになったと書いています。それは特に、大学という教育機関を中心にして、宣教と教育に奉仕をする者のことを意味するとも書かれています。すなわち、キャンパス・ミニストリーとは、大学という一つの共同体の中にあって、学内の学生や教職員たちを相手にして、ともに学び、育て合う中でキリスト教活動をすることであり、そのための牧師であり、教務教師として立つことであります。キャンパス・ミニスターたちの牧会と伝道とキリスト教活動をいわゆるキャンパス・ミニストリーと言うのであると記しておられます。

今日では、佐々木蔵之助先生について知っている人も少なくなってきたので、先生のご生涯についても簡単に記しましたが、最後に在米の佐々木蔵之助先生の上に今日も主の恵みを祈りつつ、私のこの度の報告といたします。

“I have a dream.”（私には夢がある）

渡辺 健

高等部教諭

～青山学院130周年記念高等部スピーチコンテストを通して～

10月3日（日）夕方、P S講堂。

“... even though we face the difficulties of today and tomorrow, I still have a dream ! ...”

（今日、明日の困難に直面していてもなお、私には夢があります。）

力強い生徒たちの声が、雨の中多くの観客が入ったP S講堂に響いた…。

青山学院創立130周年記念スピーチコンテストは次のような導入で始まりました。

司会者（3年生男子）：“I have a dream. あまりにも有名なキング牧師の演説ですが、これは1963年にアメリカのワシントンで行なわれたものです。それまでアメリカで行なってきた本当に悲惨な人種差別の中、キング牧師は非暴力を貫き、黒人公民権運動をリードします。行進を始め、いよいよワシントンに着いたそのとき、25万人の見守る中、神の愛と黒人解放のための夢を語り始めます。彼には夢がありました。この夢は時代を超えて今もなお私たちに感動を与えてくれます。」

司会者（2年生女子）：“I have a dream. 私たち高等部生にも夢があります。身近な夢、将来の夢、まだはつきりしていない夢。青山学院が創立130周年を迎えた今年、私たちも夢を語り始めます。」

私たち教員にはどのような夢があるのでしょうか？限りない可能性を秘めた生徒たちと接しながら、様々な夢があることだと思います。私にも夢があります。生徒たちが神を信じる喜びに満ちる日が来ると言う夢です。

〈テーマ設定〉

さて、今回のこのスピーチコンテストは、青山学院のその130年の伝統と歴史を記念して高等部でスピーチコンテストを開催できないか、という学院からの依頼を受けて企画されたイベントでした。そし

てつまりに詰まった年間行事の中から実現可能な設定として文化祭があげられ、いくつかの課題を乗り越えて、結局文化祭最終日（10月3日）にPS講堂で大々的に開催されることに決まりました。担当教員として私は、イベントを成功させるためにこの企画の目的を明確にし、わかりやすいテーマを設定し生徒への呼びかけが必要だと考えました。そこでテーマを提案する際、次のことを考慮いたしました。①青山学院の創立記念と言うことでキリスト教と関連のある項目であること、②130周年と言うanniversary と言う意味合いから更に未来を見つめる、と言うこと、③久しぶりに行なわれるイベントなので分かりやすいテーマであること、そして④生徒の身近なものるために英語の授業と有機的統合が可能であること。そしていくつかの候補の中から、複数の英語の教科書で扱われているキング牧師の “I have a dream.” がテーマとして選ばれ、コンテストではキング牧師が行なった名演説の一部を Recitation（暗唱）する部門と、自分の夢を語る Free speech 部門とで構成することになりました。

〈英語教育とキリスト教教育の

インテグレーション（有機的統合）

ところで、私がこのスピーチコンテストの担当教員に決まった時、このイベントを成功させることとは別に、私は個人的にこの企画に潜在的な可能性を感じていました。それは、英語教育とキリスト教教育のインテグレーションを成し得るイベントとなるのではないか、と言う期待でした。と言いますのも、私はキリスト教学校におけるキリスト教教育充実のための一つの突破口として、キリスト教教育と一般教育との融合、つまり神の真理を学ぶ上で、様々な教科の中で神やキリスト教を意識し学ぶことができる環境の設定、が重要だと認識していたからです。その実践の場として、学院の記念行事としてのスピーチコンテストが、格好の機会となりえると思ったわけです。英語と言う一般教科の授業の中でキング牧師につい

て学び、スピーチを覚えることによって、生徒たちがキリスト教に少しでも親近感を持ち、場合によっては深く考える機会となれば、と思ったのです。

〈授業での取り組み〉

先ほど複数の教材でキング牧師が扱われていると述べましたが、結局文化祭までに1年生と3年生の一部を除き、全校生徒の多くが英語Ⅰ、英語Ⅱ、もしくは3年リーディングの授業でキング牧師について学ぶことになりました。そしてそのクラスの多くで、授業内の課題としてキング牧師のスピーチの一部を暗唱し発表することが課せられました。そしてその発表で私たち教員は生徒たちの能力の高さに驚かされることとなりました。もちろん海外からの帰国生は英語力が高いのですが、実際には英語の力だけではなく、表情、語り口、今までには引き出していた彼らの能力を見ることとなりました。特に英語Ⅱのアドバンスクラスでは多くの生徒が最低限の暗唱部分を大きく上回る3分近く（与えたテキストすべて）を暗唱し、クラスの進度に影響を与えるほどになりました。そしてそのスピーチの最後の部分、“Free at last, thanks God almighty, free at last！”という生徒の声がクラスに響き渡ったと報告を受けましたが、このことは、私にとって期待を上回る成果と言えるものとなりました。

〈予選から決勝へ〉

しかし実際にスピーチコンテストには何人の生徒が応募てくるのか、という心配も実はありました。もちろんそれまでの過程である意味充分な成果があつたわけですが、さらにコンテストそのものが成功し生徒たちがクオリティの高い経験をするに越した事はありません。ですから、ただでさえ文化祭でそれぞれクラスの出し物や部活動の試合などで忙しい中、実際にどれほどの生徒が参加可能なのか、と心配したのです。しかし実際に募集が始まると、申込者が徐々に増え、結局、期待を大きく上回る74名が応募。予選を組むのに、日程調整で苦労するほどでした。そ

して実際の予選でも、甲乙つけがたい高いレベルの争いとなり、審査員を努めた英語科の教員は正直苦労いたしました。そして、予定よりも本選出場者の枠を広げ、各学年から選ばれた全15名が10月3日（日）の本選へと勝ち進んでいきました。

当日は雨にもかかわらず、多くの観客がPS講堂に集まって下さり、会場は盛り上がりしました。生徒たちは思い思いに今までの練習の成果を力強く発揮し、審査員の先生方（深町先生や文学部英文科の木村先生をはじめ、大学、高中部の講師の先生方）をもうならせる質の高いコンテストとなりました。生徒のすばらしさは学報に書かせていただいた記事でも触れましたが、本当に目を見張るものがありました。

〈生徒たちが神を信じる日〉

私は生徒たちに、本当に神を信じて欲しいと願っています。生徒たちの潜在能力は本当に高いと思います。学校ではその一部しか見ることができていないし、活かしきれてはいないと私は思っています。しかしその一方で、生徒たちは様々なストレスの中に生きていることも事実だと思います。中には本当に深刻な問題を背負って生きている生徒もいます。彼らが神を信じ、神に愛されている喜びの中、毎日を生活できたら、そして彼らの能力が最大限に発揮されたら、どんなにかすばらしいだろう、と思います。私には夢があります。生徒たちが神を信じ、喜びに溢れ、互いに愛し合い、彼らの能力を最大限に発揮する日が来ると言う夢です。I have a dream, today.



第20回 オール青山ハンドベルコンサートについて

小澤 淳一

初等部宗教主任

2004年9月23日(木) 第20回オール青山ハンドベルコンサートが開催されました。一つの節目として、これまでの歴史を振り返ることからはじめたいと思います。

1. コンサートをしよう

今から20年前、筆者である私は、青山学院大学の2年生に在学中で、当時厚木キャンパスにもハンドベルクワイアが出来、私は、学生指揮者を務めていました。また、現在、宗教センターの事務として奉職している國見俊介氏(オール青山ハンドベルコンサート担当事務)が、学生副指揮者を務めている時期でした。

当時の大学ハンドベルクワイアには、高等部からの卒業生もたくさん所属していました。中には初等部からハンドベルを続けているメンバーもいました。

青山学院のように、初等部から(現在は、幼稚園から)大学までハンドベルクワイアが存在する学校というのは、世界的にめずらしいことです。それぞれの部での礼拝等で奉仕する以外には、クリスマスツリー点火祭で一緒に演奏するぐらいしか一緒に演奏する機会はありませんでした。そのような中で、各部のクワイアが演奏を通して親睦を図りたい。また、ふだんなかなか体験することができないマスリングング(すべてのクワイアが一緒に一つの曲を演奏すること)をしたい、という意見が出されました。そこで、当時、大学クワイアの担当宗教主任であつた深町正信先生(現院長)と同じく当時学院宗教主任であった佐々木藏之助先生と交渉し、1984年に第1回オール青山ハンドベルフェスティバルが開催されました。開催するにあたり一つの方針を決めました。それは、マスリングングで「青山学院校歌」を演奏すること。各クワイアの演奏には、必ず讃美歌を加えることで

した。現在でもその方針は守られ、今年もマスリングングの最後の曲は、「青山学院校歌」が演奏されました。

2. ハンドベルの魅力—キリスト教教育的な意味—

20年にわたり多くのリンガー(ハンドベルの演奏者のこと)が演奏をし続けてきたハンドベルの魅力はどこにあるのでしょうか。現在、青山学院の各部で演奏しているハンドベルは、3 oct. から4 oct.、ベルの数にして35個から61個のベルを、11名から16名ぐらいで演奏しています。ベルの数はたくさんありますが、一つ一つが、例えばピアノの鍵盤のひとつひとつと対応しているのです。ですから、1台のピアノを10数名の人が左右の手の人差し指を鍵盤に置いて、自分の担当している音符がある時に、その鍵盤をたたくようなものです。楽器もたくさん並んでいて、リンガーもたくさんいますが、全体として一つの楽器です。一つの曲を演奏するのに、どの音がぬけても、どの人がいなくても、曲として成立しない楽器です。また、自分のことだけを考えて、それが自分勝手なテンポで、また、自分勝手な音量で音を出しても、やはり曲として成立はしません。テンポを合わせるために、周りの人たちと「息」を合わせ、「心」を合わせ、また、音量をそろえ、きれいなハーモニーを作り出すために、周りの人の音をよく聴き合つて、初めて美しい曲を演奏することができます。

聖書にこういう御言葉があります。

「体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。足が、『わたしは手ではないから、体の一部ではない』と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。耳が、『わたしは目ではないから、体の一部ではない』と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だつ

たら、どこでにおいをかぎますか。そこで神は、御自分の望みのままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです。すべてが一つの部分になってしまったら、どこに体というものがあるでしょう。だから、多くの部分があつても、一つの体なのです。目が手に向かつて『お前は要らない』とは言えず、また、頭が足に向かつて『お前たちは要らない』とも言えません。それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。」（コリント12:14～22）

「多くの部分があつても、一つの体なのです。」とあるように、ハンドベルもまたリンガーも、多くの部分に分かれていますが、一つの楽器です。それらが、他者を否定するのではなく、お互に違いを認め（音程はそれぞれ違うのですから）、他者に心を向けながら、演奏をする。ここに示された御言葉を、曲を演奏するという仕方で、実際に「生きてみる」のが、ハンドベルという楽器の特性であり、実際に演奏する者は、そこに心地よさを感じるのではないか。

私たちは、どちらかというと、他者との比較の中で生きています。比較することで、自分の位

置（居場所）を確かめ、時には、他者を自分よりも低いところに置くことで、安心感を得ようとする社会に生きています。その中で、知らず知らずのうちに、心がゆがみ、本当の自分の姿を見失っていることがあるのではないでしょうか。ハンドベルは、そのような社会にあって、聖書の示す人間本来の姿を具体化するものと言えましょう。そこに、多くの人が魅力を感じるのです。

3. 進むべき道

3年ほど前より、オール青山に、大学や女子短期大学のOGOBクワイアをゲストとしてお迎えしています。大学・女子短期大学を卒業し、社会人になっても、ハンドベルの演奏を続けている方々です。仕事の合間に縫つて、教会における礼拝奉仕や小学校などの音楽鑑賞会での演奏を行っています。

青山学院のスクールモットー「地の塩・世の光」が示すように、ハンドベルの演奏を通して、聖書の御言葉を具体的に生きることで良い証をたて、社会に貢献する人々をこのコンサートに関わる人たちから送り出すことができればと願います。



第20回 オール青山ハンドベルコンサート（前列向かつて右端が筆者）

青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料

その9 — 青山学院関係史料 —

氣賀 健生

大学名誉教授

青山学院資料センター所蔵の貴重文献・史料紹介第9回。前回は主としてキリシタン禁制の高札と隠れキリシタン探索のための踏絵について紹介しましたが、今回は専ら「青山学院の歴史」に関する展示史料について御紹介を致します。

まず、前回紹介した隠れキリシタン遺品の前にある陳列棚の土器・陶器類から始めましょう。

1992年、青学会館の拡張工事に伴って、青山学院東門際のウェスレー・ホール横から鍵の手に屈曲して大学4号館の下までを発掘した時の、膨大な出土品の約1%程度の遺物がこの棚に展示されています。残る99%に及ぶ大部分の出土品は大学6号館地下の考古学倉庫に眠っています。何とか陽の目を見させたいのですが、現在の施設では如何とも致し方がないのが現状です。博物館があれば、と願うのは筆者ばかりではないでしょう。言うまでもなく、博物館・資料館は研究機関の中核機能です。これらの出土品もさることながら、当資料センターには、主として日本のプロテstant・キリスト教史関係の貴重な史料が所蔵されています。中には日本でここだけにあるもの、更には世界的にみても貴重な史料もあります。それらの幾つかは既に本シリーズで紹介しました。これからも引き続き紹介してゆきます。こうしたものを基に当資料センターを一層充実させ、青山学院博物館（仮称）とでもいうべきものを実現させたい、と願うものです。

さて、本題に戻りましょう。この発掘は1991年9月24～28日の試掘の後、翌年5月1日から本格的に行われ、大きな成果をあげることができました。発掘は本学史学科考古学専攻の院生・学生によって行われ、指導に当たったのは当時の吉田章一郎名誉教授、田村晃一教授、清水信行専任講師でした。

青山学院の周辺は、古くは平安時代末から中世にかけて、渋谷氏が城を構えて支配していたところで、現在の金王八幡宮の地が渋谷城跡と

考えられています。この辺りは江戸の最西端に当つていたので、徳川家康の江戸入城直後から、敵の西方からの攻撃に備えて譜代大名青山忠成がこの地に配置されました。現在の青山学院構内に当る地は、明暦3年（1657）の「江戸大絵図」では、長谷川久三郎の名が見えますが、これについては徳川氏に深い関係があったということ以外には明らかことは解っていません。その後1695年に伊豫西条藩松平左京太夫の上屋敷が置かれ、明治維新に至っています。

さて、上段に並んだ発掘品から見てゆきましょう。最初にあるのが土器行平（把手・注口のある陶製の鍋）。順に左へ土器灯明受皿、土器秉燭（ポータブル燭火）、土器焼塩壺、土器玩具数種類、すべて年代不詳です。そしてここに縄文土器が2点展示されています。ウェスレー・ホールのあるところはその昔池があつて、そこにあつた小さな川の上の丘から発掘されたものですが、僅かふたつの土器からこそ青山学院構内の地に縄文人が住んでいたと俄に断定することは難しいでしょう。然し、周辺、例えば国学院大学構内などには縄文遺跡が多いことでもあるし、渋谷駅近くの渋谷川（目黒川）から程近いところですから、或いはここに縄文人がいたかもしれないし、或いは全くいなかつたかもしれません。

二段目を見ましょう。まず胞衣皿。これはあと産の、例えば臍の緒などをこの皿にのせて、来た人に踏んでもらう、踏みつけることによって強い子に育つ、という言い慣わしが古くからありました。その左は軒桟瓦で1820～60年代のものと推定され、軒丸瓦と軒平瓦と組合せて一枚とし、軒の先端をかざつたものです。

左側の棚には、皿、鍋、徳利、瓶など、陶器・磁器が並んでいますが、殆ど肥前系、瀬戸・美濃系、信楽焼系のものです。江戸時代、この青山の地が伊豫西条藩松平家の上屋敷でしたから、多くの武士達が住んでいたことを物語っています。

さて、この出土品の棚の後をふりかえると、そこに1883年の「東都青山絵図」があります。1883年というのは青山学院がこの地の購入を完了した時（1月）の地図で、松平左京太夫の上屋敷が示されています。隣は「江戸名所図絵」からの富士見坂（現在の宮益坂）一本松の絵。その隣には酒井温理氏（青山学院の“名物教授”でした）の“青山”の地名の由来についての調査報告書がありますが、この地名が“青山常盤介忠成”に由来していることが証明されています。このガラスケースの裏側にあるのが大正初期の渋谷駅、明治末年のそれぞれ青山学院前大通りと道玄坂、宮益坂下の写真です。うたた今昔の感といったところですね。

中央ホールの左奥には青山学院の前身のひとつ、美会神学校関係の書類がみられます。その右はフィランダー・スミス・ビブリカル・インスティテュートの鐘です。その向い側にこの神学校の建物の模型がありますが、当時（1886年完成）は粋な西洋館として有名で、時計台の神学校、鐘の鳴る神学校として37年間時を刻み続け、1923年の関東大震災の時倒壊しました。

ホールの奥の正面には青山学院の事実上の創立者ジョン・ガウチャー博士（ガウチャー博士については青山学報150号を参照）の肖像が掲げられています。その下にはガウチャーの15,000ドルの寄付によって建てられたガウチャーホールの模型、1992年当時のDorsey学長から贈られた記念銘板、ガウチャーホールと新ガウチャーホールが並んで写っている珍しい写真があります。ガウチャーホールは1887年に建てられましたが、1894年の地震によって破損。修理使用されていましたが、1906年新ガウチャーホールの完成とともに解体されました。これは解体直前の珍しい写真です。更に1919年頃の青山学院構内の写真がありますが、新ガウチャーホール、大講堂、フィランダー・スミス神学校、勝田館な

どが写っていて、堂々とした光景です。（勝田館の由来については青山学報165号を参照）これらは1923年の関東大震災によって全部倒壊しました。

ホールの中央には宣教師が使ったタイプライターや伝道用幻燈機が置かれています。その前に青山学院初期或いは前身校時代の官庁への設立、改廃等の諸届書類がありますが、校主板垣帰一とか菊池卓平とか聞き慣れない名前が記されています。これは当時外国人は法的代表者として認められなかつたので例えばマクレー総理の下で板垣が校主と名乗っていたものです。これら有名無名の青山学院初期の功労者の肖像が資料室に入って右側に並んでいます。その隣には青山学院につくした初期の宣教師の肖像があります。（これらのうち津田仙、国沢新兵衛、アイグルハート、ソーパー、スペンサーについてはそれぞれ青山学報171号、151号、166号、169号、205号参照）

さて右側の列は青山女学院関係の史料です。さゆり会（旧高等女学部と女子専門部の卒業生の会）の史料を含めて、「女子系の歩み」とある大きな年表の向い側には、海岸女学校、手芸学校以来の興味ある史料が並んでいます。上段に並んでいる女性宣教師達は、いずれも単身赴任して初期の女子教育に儘した人々です。中でもスクーンメーカーは1874年日本派遣女性宣教師第一号として、23歳の若い身空で来日、この年11月16日に“女子小学校”を麻布新堀町に開校しました。これが青山学院の濫觴です。（スクーンメーカーについては青山学報164号参照）

なおこの棚の右端に「マッカーサー司令部関係書類」があります。これは1945年以降占領軍が旧日本軍部関係者をはじめ、軍国主義的思想をもつ者を調査し、教職追放の根拠とした調査検閲記録です。

紙幅がなくなりました。残りは次号に続けます。
(前号訂正：前号11頁右列5行目。遠藤周作『踏絵』は遠藤周作『沈黙』)

『天使がうたう夜に』～世界のクリスマスものがたり～

小塩トシ子・久世礼子 編（日本基督教団出版局）

川島 祥子

青山学院幼稚園



私がこの本に出会ったのは、今から5年前当時、短大の宗教センターにおられた向野理恵子さんが、短大のクリスマスの祝会の席でこの本の中に収められている「聖なる夜」を朗読して下さった時であった。心に希望の光が射してくるようなひとときであった。

「天使がうたう夜に」はクリスマスの季節に語って伝えたい、クリスマスにまつわる、世界の物語を集めたものである。家庭の中で囲炉裏を囲んで代々語られ伝えられてきたようなものや、現代の作家が書いたものなどが収められている。どのお話もクリスマスの本当の喜びに触れられるような、暖かさに満ちている。

クリスマスの本当の喜びとは何であろうか。憎しみと差別、戦争と殺戮、絶望や無力感の中にある人々、そして声なき動物たちの苦しみによってさえも、私たちの心は絶えず痛み続けている。しかし、それでもなお私たちの心の中に決して消えることのない“燈火”がある。

それはイエス・キリストである。私たちの全ての罪を負って十字架につけられ、そして三日目に復活され、罪に勝利された「平和の主」イエス様にこそ一切の希望の根源がある。

クリスマスの季節、私たちは贈物を交換したり、特別の料理を頂いたりするけれども、そのような中で私たちの心が欲しているのは、実はクリスマスの一番大切な「愛」に触れることなのではないか。神

様が与えてくださった究極の愛に私たちの心を招いてくれる、クリスマスのストーリーを子供たちに伝えるということも、物以上に大切にしたいと思う。

本書に収められている中で、どのお話も心に残るが、その中で短編ながら心引かれるのが「小さなかいばおけの前で」というお話である。ドイツのヴァルター・バウデートという人の創作したものである。小さな坊やが「クリッペ」といわれる、かいばおけに眠る赤ちゃんイエス様、マリアやヨセフ、羊飼いや学者たちの木彫の人形の世界に入り込んでしまうところからお話が始まる。「みんな何か持っているのに、赤ちゃんだけ何も持っていない。」ことに気づいた坊やは「ぼく、君に一番いいものをあげるよ。」と言って新しい自転車にしようか鉄道セットにしようか考えるのですが、なんと赤ちゃんは坊やの「やりなおし」のテストが欲しいと言うのである。とまどう坊やに、赤ちゃんは「ぼくは君の“やりなおし”が全部ほしいんだ。そのためには生まれてきたんだから。」と答えるのだ。赤ちゃんはその後も、こわれたミルクのコップも欲しいと言う。「こわれたものは、何でも持つておいで。ぼくがなおしてあげる。」と。そしてもう一つ欲しいものがあると言う。それはコップが割れた時、坊やがお母さんに言った言葉なのである。坊やはとうとう泣き出してお母さんについたうその言葉だったことを話す。しかし、赤ちゃんは「その言葉がほしかったんだよ。…君が怒ったり、うそをついたり、いばつたり、こそそそしたりしたときには、ぼくのところにおいて。君をゆるして、そうじゃないようにしてあげるから。のために、ぼくは生まれたんだよ。」と。このお話を読む時、びっくりした坊やと同じように、あの赤ちゃんイエス様にゆさぶられ、そして慰めに満ちてくるのを感じる。

クリスマスの物語を聞きながら、聖書に書かれた一番最初のクリスマスのお話に再び耳を傾けようではないか。

久留米バイブル・フェローシップ (KBF)

チャールズ・ブラウン

経営学部 助教授

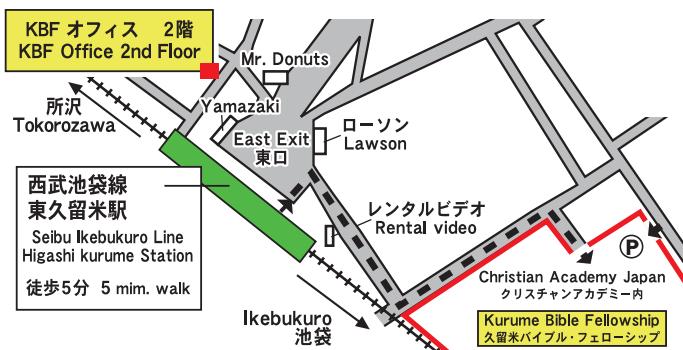
東久留米市へ移転した昨年から、集わせていただいている久留米バイブル・フェローシップ (KBF) をご紹介させていただきます。この教会は、財団法人 日本クリスチヤンアカデミー (CAJ) に所属しており、毎週日曜日に開催されています。そのワークショップの特徴は、さまざまな宗派間の国際性をもつた教会で、英語で礼拝サービスが行われますが、携帯ラジオを介した日本語の同時通訳で聞くこともできます。約350人の会員が所属しており、日曜礼拝には150人から200人くらいが参加しています。

KBFは、ジョン・マイヤー氏、ジョン・ローズ氏、アラン・ディロン氏らによる家庭礼拝として、1960年代初期に始まったとのことです。東久留米でCAJが設立されたときに、多くのクリスチヤン・ファミリーがその地域に移り始めました。ジョンとベティ・マイヤー氏の家庭で、子供たちのために教会学校が開かれ、大人の例会や通常の礼拝サービスもすぐにつきました。何年間か過ぎKBFの規模が大きくなるにつれ、東久留米市の周辺地域の方々に向けて広くサービスがされるようになりました。

KBFのユニークな点は、教会サービスやバイブルスタディが開催される時間帯に工夫がなされていることです。以前に私が出席したことのあるほとんどの教会は、サービスが始まる直前の早朝にバイブルスタディをもっていました。このことは良いことはありますが、実際には、多くの人は出席時間を少し遅らせ、バイブルスタディをスキップしていました。KBFはその時間帯が逆になっています。つまり、朝9:30から教会サービスが始まり、コーヒーブレイクとして短いフェローシップがもたれた後に、45分間のバイブルスタディがあります。これですと、多くの人が、フェローシップとバイブルスタディに残りますので、そのことが充実したクリスチヤン生活を送ることに繋がります。

この教会は、ガイ・ベルグ牧師とマルタ・ベルグ牧師、さらにティム・ジョンソン副牧およびジェニー・ジョンソン副牧によって、牧会されています。さまざまな年代や、色々な国籍の人々が集える暖かくフレンドリーな教会です。皆さんも、ぜひいらっしゃってください。

(和訳: 大学経営学部教授 玉木欽也)



KBFについてのお問い合わせはこちらにどうぞ

KBFオフィス

〒203-0014 東京都東久留米市東本町3-19 マルゴビル202
(西武池袋線東久留米駅下車 東口より徒歩3分 お花屋さんの2階です。)

日曜集会はこちらです。

クリスチヤン・アカデミー・イン・ジャパン
(西武池袋線東久留米駅下車 東口より徒歩5分)

幼稚園 より

2学期も子どもたちはよく遊び、また、様々な行事も行われ、充実のときを過ごしてきました。今年は裏庭のクヌギが初めて立派な実を落とし、また銀杏拾いや秋の遠足でも、秋の自然を身体いっぱいに感じ、収穫を喜びました。一方で、浅間山の噴火により、軽井沢キャンプが急遽、幼稚園お泊まり会になつたり、相次ぐ台風や地震のニュースなど、人間の力では計りえない自然の大きさも感じました。その中で、すべて神様によって守られ、導かれ、こうしてクリスマス礼拝を迎えることに感謝です。

3学期も、今までの経験を土台として、遊びの内容も、友だちとのかかわりもより深め、よい締めくくりのときを過ごせるようにと願っています。

おもちつき

1月28日

重い杵を持って力いっぱいいた、格別においしい、つきたてのおもちを会食でいただきます。

終業礼拝

3月11日

全園児・保護者でこの1年の歩みに感謝し、礼拝をまもります。

卒園式

3月14日

3年間、この幼稚園で過ごし、心も身体もぐんと大きくなった年長の子どもたち。深町園長先生から一人一人に卒園証書が手渡され、喜びと感謝をもって卒立つていきます。

(教諭 久 洋子)

初等部 より

初等部の入学試験も終わり、その期間を利用して児童の有志が、止揚学園などへの短期留学へ出かけました。

10月26日(火) 聖書週間特別礼拝

新校舎に引っ越しした最初の特別礼拝なので、「新しい革袋」ということをテーマにお話を聞きました。説教者は初等部宗教主任小澤淳一。

11月12日(金) となり人を覚える礼拝

児童宗教プロジェクトのCCWAのスタッフを中心に、初等部が支えている6人の里子の紹介と、04年3月にフィリピンの里子を訪問した5人の児童の報告を受けました。

11月17日(水) 創立記念礼拝

130年の創立記念礼拝を守りました。お話は、初等部長の樋口善一先生。

11月25日(木) 感謝祭礼拝

神様の恵みとして収穫物を礼拝堂に持ち寄り感謝をする礼拝を守りました。お話は、宗教主任。

12月10日(金) 保護者のためのクリスマス礼拝

新1年生の保護者の方々もお迎えしてクリスマスの礼拝を守りました。

12月20日(月) クリスマス讃美礼拝

50年以上同じ台本でページェントを守ります。6年間に1度だけ、ご奉仕ができます。

(宗教主任 小澤 淳一)

中等部 より

創立記念礼拝

中等部の創立記念礼拝は、例年中等部祭前日に守ります。今年は11月5日(金)に、神奈川県大磯にある聖ステパノ学園小中学校校長の小川正夫先生をお招きました。ステパノ学園の子供達を暖かく見守り育んでおられる先生から、「大きな手小さな手ともに祈り ともに学ぶ」との、学院の創立記念の言葉をテーマとして、お話を伺いました。

クリスマス礼拝

12月17日(金) 14時から始まります。毎年同じプログラムのページェント形式で礼拝をしていますが、実は細かい所で少しづつ工夫をし、更新しています。昨年は聖歌隊のメンバーが持つキャンドルスタンドを新しいしっかりしたものに変えました。今年も新しい工夫をして参ります。

宗教講演会

中等部では、国際交流の講演会と宗教講演会を隔年で行なっています。今年度は、05年1月25日に宗教講演会をいたします。講師はJOCS(日本

キリスト教海外医療協力会)の会長、小沢英輔先生です。『国際医療協力のめざすもの』と題してお話を伺います。

先生はお若い時にカンボジアで、一年間病院の技術指導をなさるなど、活躍されました。関東中央病院神経内科部長を経て、現在は救世軍清瀬病院診療部長でいらっしゃいます。この会には、保護者の出席も歓迎です。

(宗教主任 石丸 泰樹)

高等部
より

伝道週間礼拝

10月25日～29日の伝道週間には、講師に四谷新生教会牧師の薛恩峰氏をお招きました。薛先生は日本基督教団初の中国出身の牧師です。中国の牧師の家に生まれ、1986年来日、同志社大学神学部で学ばれ、日本での伝道を志されました。今回も高校生たちに3回に渡り素晴らしいメッセージがありました。

「プラス思考で生きる」と言う総主題の下、3回に分けて神様を信じて生きる喜びと力を語つて下さいました。

「日本との出会い」(マタイ福音書7章7節)
「右の頬・左の頬」(マタイ福音書5章38～32)
「プラス思考で生きる」(マタイ福音書25章14～30)
この伝道週間の期間に、毎朝英語で行なうモーニングバイブルアワーを持ちました。

創立記念礼拝

高等部では11月17日(水)に創立記念の特別礼拝を行ないました。礼拝では卒業生(6期生)で、現在アジア学院校長の田坂興垂先生が、「共に生きる喜び」と題してメッセージをくださいました。

クリスマス礼拝

高等部のクリスマス礼拝は12月17日(金)PS講堂で行なわれます。第1部の礼拝では、深町正信院長が説教をしてくださいます。第2部の祝会は生徒の音楽、ダンス、劇によるクリスマス会です。

クリスマス合同コンサート

聖歌隊、オルガン部、ハンドベル部による合同コンサートは12月18日(土)にガウチャー記念礼拝堂で行われます。今年もオルガン部メンバー

によるオルガン演奏、ハンドベル部のハンドベル演奏、聖歌隊の合唱によるメサイアが上演されます。
(宗教主任 坂上 三男)

女子短大
より

クリスマス・チャペル・コンサート

日 時: 2004年12月17日(金) 18時半～20時
場 所: 短大礼拝堂
出 演: 短大聖歌隊、短大ハンドベル・クワイア、
ゴスペルグループ

天城冬の集い

期 間: 2005年2月1日(火)～3日(木)
場 所: 天城山荘
テー マ: 「平和を実現する人々」
特別講師: 青山学院大学名誉教授 関田寛雄

卒業礼拝

日 時: 2005年3月22日(火) 13時半
場 所: 青山学院講堂
説 教: 短大宗教主任 伊藤勝啓
(宗教活動委員 湯本 久美子)

大学
より

夏期休暇中には、宗教センターに属するキリスト教4団体(青山キリスト教学生会、聖歌隊、第二部聖歌隊、ハンドベル・クワイア)が、演奏奉仕や合宿等の活動をおこなっています。

①青山キリスト教学生会(A.C.F.)

夏期合宿が9月14日(火)～17日(金)、群馬県片品村にある「尾瀬しんこう荘」でおこなわれた。伊藤悟宗教主任、シュー土戸ポール宗教主任、黒沼健顧問の指導のもと、主題テーマ「ACFarm」～主は私の羊飼い～を掲げ活発な討議がなされ、キリスト教の学びと相模原祭・青山祭の準備が真剣に話し合われた。また、バーベキューや花火等のリクリエイションの時間をもち、親睦を深めることができた。

② 聖歌隊

「演奏旅行」として、毎年全国各地の教会・老人ホーム等で讃美の奉仕と慰問をおこなっている。今年も30名の部員で、9月15日(水)～21日(火)の日程で奉仕をおこなった。熊本では、熊本福音ルーテル教会・老人ホーム慈愛園を訪問、ミサ曲など約10曲を披露した。また鹿児島では、日本キリスト教団鹿児島加治屋町教会でコンサートを開き、続いて鹿屋では、元ハンセン氏病の患者の方の施設での「歌の慰問」をすることができた。充実した発表の場があたえられた7日間であった。

③ 第二部聖歌隊

昨年、岩手県釜石市での奉仕活動が地元の新聞にとりあげられ、「新生聖歌隊」と意気込みを新にした。ことしの夏合宿は、代々木の「オリンピック青少年記念センター」に宿泊し、麻布の「靈南坂教会」を練習会場として、佐々木正利先生、鳥海寮先生の指導により「声造り・体造り」に励んだ。宿泊所では、大庭昭博宗教主任の聖書研究により「パウロ」を学び、心の糧とした。一時3～4名だった隊員も現在は11名と「激増」、来年3月の短大礼拝堂でのチャペルコンサートを目標に、練習に勤しんでいる。

④ ハンドベルクワイア

8月30日(月)～9月1日(水)の日程で、多摩スポーツセンターにおいて恒例の合宿が実施された。参加者14名。4月に新入生2名を迎えたが、そのうちの1名は中学高校とハンドベルを打っていたので、すぐに上級生と一緒に演奏曲目を奏でることができるようになった。またもう1人も、半年足らずの間にメキメキと腕前を上げ、今回の合宿でさらにレベルを上げることができた。合宿では、コーチの木村栄子先生と担当の大島力宗教主任のもと、演奏旅行とチャペルコンサートの演奏曲目の練習を重点的におこない、充実した3日間を過ごすことができた。

(宗教センター事務室 田中 健夫)

本部
より

昨年は、ジョン・ウェスレー生誕300年記念行事として、カミツカ氏ピアノ演奏会、英国オックスフォード大学ニューカレッジ聖歌隊演奏会、速水優氏講演会、ウェスレー記念品展示、記念カード作成、記念フラッグの掲示等があり、まさに「ウェスレー」一色であった。今年は「青山学院創立130周年」の行事が目白押しであり、現在もいくつかが進行中である。その中で特筆すべきは、学院の創立者の1人であるドーラ・E・スクーンメイカー女史の生涯が1冊の本となり、学院から出版されたことであろう。女子短期大学非常勤講師である棚村恵子氏が、多大な時間と労力を費やされて完成にまで至ったのである。「しなやかに夢を生きる」という題が示すとおり、伝道という「夢」を実現するために捧げた女史の生涯が、詳細に綴られている。「積読」ではなく、ぜひ「味読」をしていただきたい130周年の「価値ある宝」である。

(宗教センター事務室 田中 健夫)

No.81号 訂正

・表紙
2004年4月 高中部 → 2003年4月
・P.15(女子短大より)の一番下の行
女子短期大学校舎 N103
→ 女子短期大学校舎 S202

〈表紙写真〉

中庭の吹流しの「魚」の意味

「イエス、キリスト、神の、み子、救い主」この五つの単語のギリシア語の頭文字を合わせると「イクトュス」となり、それは「さかな」を意味します。古代教会の人はこれを信仰告白の「しるし」としていたことが、シェンキヴィツチの小説「クオ・ヴァディス」(主よ、いざこに行きたもう)の中にも出てきます。救い主の誕生を喜んで吹流しにして緑と赤のクリスマス色に描いたものです。

編集後記

私たちすべての人の「救い主」イエス・キリストの誕生を祝う時が近づいて参りました。今号には、クリスマスのメッセージの他に、青山学院創立130周年にふさわしい記事も掲載することができました。深町院長先生、坂上先生、その他多くの方々のご協力を得て、今号を発行することができたことを深く感謝致します。青山学院各部で、喜びに満ちたクリスマス礼拝が守られますことを心からお祈り致します。心温まるクリスマスをお迎え下さい。
¡ Feliz Navidad !

(初等部 柚村 满)

Wesley Hall News 第82号

発行 青山学院宗教センター 宗教部長 東方敬信
東京都渋谷区渋谷4-4-25
TEL.03-3409-6537(ダイヤルイン)
URL:<http://www.aoyagakuin.jp/rcenter/index.html>
E-mail:agcac@jm.aoyama.ac.jp
編集 ウェスレー・ホール・ニュース編集委員会
印刷 万全社